



Data

監督・製作・脚本：ジェイソン・ラ
イトマン

原作：ジョイス・メイナード『とら
われて夏』（イースト・プレ
ス刊）

出演：ケイト・ウインスレット／ジ
ョシュ・ブローリン／ガトリ
ン・グリフィス／トビー・マ
グワイア／トム・リピンスキ
ー／クラーク・グレッグ／ブ
リード・フレミング

👁️👁️ みどころ

今から40年前の1974年、山口百恵15歳の時のヒット曲『ひと夏の経験』がどんなテーマだったかは、篠山紀信が撮影した黒のビキニ着で寝そべる彼女の姿と合わせ考えてみれば明らか・・・？しかして、肉感性で山口百恵を圧倒するケイト・ウインスレットが、脱獄囚に捕らわれて過ごした5日間だけの夏とは？

18歳の時にサリンジャーと同棲していた女流作家ジョイス・メイナードの原作に見る女性心理の分析は、先日亡くなった性愛小説の大家・渡辺淳一氏にも劣らない素晴らしさだ。本作のストーリーは常識では考えられない稀有な事例だが、結末は想定内の範囲内。しかし、その後の更なる結末は、なぜかすごいハッピーエンドに・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■邦題を見て思わず思い出したのは、あの名曲！■□■

本作の邦題は『とらわれて夏』だが、原題は『Labor Day』。これはアメリカの「労働感謝の日」のことで、9月の最初の月曜日が休みになる連休らしい。日本では新年度や新学期は4月1日に始まるが、アメリカでは9月1日からが新年度・新学期。したがって、8月の終わり、すなわち夏の終わり、と秋の始まりの季節は、新年度へのリセットの時期、転校、転勤の時期、そして衣替えの時期になる。そんな原題が邦題では『とらわれて夏』とされたのは、13歳の少年ヘンリー（ガトリン・グリフィス）が見た、ひと夏の終わりに起きたある特異な事件を描いたためだ。その特異な「とらわれて夏」という体験は、13歳の少年にとって命の危険も伴っていたが、それ以上に貴重な成長の5日間になったらしい。

そんな邦題を見て思わず私が思い出したのは、山口百恵が15歳の時に歌った1974年の大ヒット曲『ひと夏の経験』。「あなたに、女の子の一番大切なものをあげるわ」との歌詞がいう「女の子の一番大切なもの」とは一体ナニ？当時、それが大きな反響を呼んだものだ。JR大阪駅前にてきたグランフロント大阪北館ナレッジキャピタル開館1周年を記念して、4月5日から「篠山紀信展 写真力」が開催されたが、そこでは山口百恵、大原麗子、宮沢りえらをモデルにした、かつてのあの写真、この写真が再び大人気となった。山口百恵をモデルにした「あの写真」とは、黒のビキニの水着姿で海に浮かぶボートの上に無防備で横たわった山口百恵の写真だ。そのインパクトは宮沢りえのオールヌード写真には及ばなかったが、すごいものだった。山口百恵が体験した「ひと夏の経験」が半分ナゾなら、13歳のヘンリー少年とケイト・ウィンスレット扮するその母親アデルが体験した「とらわれて夏」も半分ナゾ。しかし、本作をじっくり観察してみると・・・。

■□■冒頭の心理状況の説明は少しうっとうしい・・・？■□■

本作は脱獄囚ながら実は心優しい男フランク（ジョシュ・ブローリン）と、夫ジェラルド（クラーク・グレッグ）との離婚の中で孤独に心を閉ざしてしまった女性アデル（ケイト・ウィンスレット）が互いに心を惹かれていく物語。誰がどう考えてもそんなケースは稀有だから、冒頭どうしてもアデルの心理状況の説明が必要になる。そこで本作は冒頭、アデルの13歳になる一人息子ヘンリーの視点から、ヘンリーのナレーションでアデルが今置かれている離婚に伴う客観的状況と現在の心理状況の説明をさせている。それはそれでわかりやすいからいいのだが、映画としてはそれが少しうっとうしい感も・・・。

『サンキュー・スモーキング』（06年）（『シネマルーム12』373頁参照）に続く、『JUNO/ジュノ』（07年）（『シネマルーム19』294頁参照）、『マイレージ、マイライフ』（09年）（『シネマルーム24』34頁参照）で世界を魅了したジェイソン・ライトマン監督作品だから、それなりの工夫で作られていることはまちがいないが、この点は賛否両論があるのでは？

■□■この出会い（？）の中での女性心理をどう読み解く？■□■

ナレーションに続いては、1カ月に一度の買い物のためにスーパーにやってきたアデルとヘンリー親子が挙動不審な中年男フランクから懇願されたり脅かされたりしながら、半ば強制的にアデルの車に乗りこまれ、アデルが運転するその車でアデルの家に入り込むシーケンスが描かれる。その目的はケガをしている足の治療をし、しばらく休憩の時間をもらうためらしいが、この男は一体誰？テレビニュースでこの男がたった今刑務所から脱獄してきたばかりの男だと知ったアデルとヘンリーは驚愕したはずだが、さて、この男はこれからどうするの？警察はそんなに遠くまでは逃走していないと見て必死で捜索しているようだから、発見は時間の問題！まさか、足のケガが完治するまで、この家に居座るつもりはないはずだが・・・。

そんな導入部から始まる本作は、タイトルどおりの5日間の「とらわれて夏」を過ごす中で、意外意外が連続する展開をみせる。その結果、アデルとヘンリー、そしてフランク

も、ある重大な決断を下していく。そして、いよいよそれを実行に移そうとしている段階で残念にも……。

ライトマン監督が「人間が持つ、説明できない欲望を描いている」と絶賛した原作は、自叙伝『ライ麦畑の迷路を抜けて』で18歳の時にサリンジャーと同棲していたことを告白した女流作家ジョイス・メイナードの小説らしい。そんな感性豊かな女流作家なればこそ書くことができた、何とも微妙な女性心理にケイト・ウィンスレットが挑戦！さて、あなたは、本作に描かれる彼女の心理をどう読み解く？

■□■日本と違うアメリカの住宅事情の理解を！■□■

ハリウッド映画で描かれるニューヨークは摩天楼の大都会で、超高層ビルが林立している。しかし、それはアメリカでも大都会だけのことで、田舎は普通の一軒家が多い。本作の時代は1987年の夏の終わり。本作の舞台はアメリカ東部のニューハンプシャー州にある小さな町だ。そんな町では、前の夫ジェラルドと離婚し、息子のヘンリーと一緒に暮らしている女性アデルといえども、住んでいるのは庭付きの一軒家。しかも、当然車も持っている。もっともスーパーへの買い物も月に一度だけというからそれほど裕福ではなさそうだし、よく見れば、彼女の乗っている車もデカイけれどかなりボロ。しかし、それでも彼女の自宅はブライバシーが保たれているから、急に同居者(?)としてフランクのような男が一人加わっても、すぐに隣人にバレることはないわけだ。

日本のマンションでは玄関のドアから人が出入りするだけでその存在が隣家にわかるし、安モノで壁の薄いマンションなら、少し大きな声でしゃべればその声が隣に筒抜けだから、アデルの家に男が入り込んでいれば、隣家にすぐにわかるはずだ。したがって、同じ日に観た『プリズナース』(13年)と同じように、本作のストーリーを理解するためには、日本とは違うアメリカの住宅事情の理解が不可欠だ。

■□■脱出の意欲は？そのための努力は？■□■

ハリウッド映画では治安の悪いアメリカ(?)を反映してか、突然の闖入者から家族を守るための戦いをテーマにした映画がいくつかある。『パニックルーム』(02年)では、犯人から子供を守るため、ものすごいママパワーを発揮する女性をジョディ・フォスターが熱演していた(『シネマルーム2』162頁参照)。

本作に見る脱獄犯フランクは、そのひげ面だけ見ればいかにも凶悪そうだが、スーパー内でヘンリーを脅迫する時から物腰は至って穏やか。それはアデルの家の中に入ってから変わらないうえ、「足の傷が治るまで休ませてくれれば決して2人には危害を加えない」と約束。さらに誰か来たときには君たちを縛るが、それは君たちに犯人隠匿の罪を着せないためだ、ときちんと説明するから、少し意外だ。もちろん、それをまともに信用するほどアデルも単純ではないが、何となくこの男は信用できそう。そんな気持ちになったことはまちがいないさうだ。しかし、「夏の終わり」という季節の中、薄着で肉感的な姿を惜しげもなく披露しているアデルがおとなしくフランクの手によってイスに手足を縛られている風景を見てみると、この男がついムラムラし、オオカミに豹変したら……。そんな危

険を感じざるをえないが、ひょっとしてそれは昔観たボルノ映画の考え方・・・？

1987年という時代だからケータイは普及していないものの、家には電話は必ずあるはず。また、いかに用心深く気を張り詰めているとはいえ、フランクにも眠っている時間はあるのだから、アデルとヘンリーが心を合わせ、目配せしながらこの状況を隣人や警察に伝えることは決して不可能ではないのでは？ところが、ヘンリーの視線で作られている本作では、ヘンリーは盛んにフランクの観察をし、その分析をしているものの、この場を脱出し、救出を求めようとする意欲はあまり見せない。また、そのための努力もあまりしていないようだ。

もちろん、そんなことをすれば母親に危害が加えられる危険性が増すから利口なヘンリーはそれを避けたのかもしれないが、こんな風に脱獄犯の言うとおりの行動をとるのはある意味、奴隷主義では？それともヘンリーに言わせると、こうやって結局的にフランクのやり方に協調し、トラブルを避けるやり方こそ、安倍総理が現在さかんに提唱している、積極的平和主義・・・？

■□■ヘンリーはこの脱獄犯に父親の姿を？■□■

今年の日本シリーズは1964年の阪神VS南海以来、50年ぶりに阪神VSオリックスの関西決戦！現在、プロ野球はそんな話題でもちきり(?)だが、秋風が吹く頃のセ・リーグはやはり巨人の独走・・・？日本ではそんな毎年のプロ野球の話題にコト欠かないが、最近とんと見なくなっただが、父親と息子との



©MXXIV Paramount Pictures Corporation and Frank's Pie Company LLC. All Rights Reserved.

キャッチボール風景だ。昔は、父親と息子の男同士のふれあいとしてのそんな風景があちこちの路地で見られたが、路地がなくなってしまった今、そんな風景はほぼ死滅してしまった。しかし、土地の広いアメリカでは、今なおそんな風景があちこちに残っている。

レッドソックスのファンであることを通しての父親と息子の触れ合いは『帰らない日々』(07年)にも描かれていた(『シネマルーム20』133頁参照)が、母親と二人暮らしのヘンリーにはキャッチボールはおろかそんな話題すらもなかった。すると、野球のボールの握り方からバットの振り方まで教えてくれるフランクは、父親代わり・・・。また、アメリカでは家の修理や車の修理さらに台所の水回りの修理まで何でも父親がやるものと相場が決まっている(?)から、母一人のヘンリーの家庭ではあちこちにその手のニーズがあったようだ。そこで、家の中に息を潜めて隠れているはずの脱獄犯フランクには、キャッチボールのお相手の他、あちこちの修理というお仕事が・・・。また、車社会のアメ

リカでは初デートに女の子を誘うのも車に乗せてのことだから、もしその途中タイヤがパンクすれば、カッコよくその修理をするのも男のたしなみらしい。今ドキの日本の若者はこの手の大工工事や修理作業は苦手な奴が多いが、アメリカではそんなことを手取り足取り教えてくれたり、身をもって実践してくれるのは、真に頼りがいのある父親だけだ。

両親が離婚する中、女の子たちはみんな再婚する父親ジェラルドを親権者として新しい家庭に入っていたが、ヘンリーだけは自ら母親のアデルを親権者にするのを選んだらしい。それは子供ながら、男の子の自分がか弱い母親を守ってやらなければ・・・と考えたためだが、いかんせん13歳の男の子ではまだまだ力不足。しかし、突然の闖入者とはいえ、フランクが家の中に入ってくると、13歳のヘンリーはその姿にアメリカの理想的な父親像を見ることに・・・。

■□■アデルは、この男に何を見出したの?■□■

ゴールデンウィーク中の5月5日に作家・渡辺淳一が80歳で死亡したことが報じられた。彼が小説の中で求め続けたのは、男女の愛。それも、究極の性愛だ。壮年期も老年期もカッコよかった渡辺氏が、最近丸々と膨らんだ顔になっているのを見て、私はこれはきっとガン治療のための投薬のせいと思っていたが、案の定・・・。

それはともかく、『タイタニック』(97年)、『タイタニック 3D』(12年)、『シネマルーム28』未掲載)では、レオナルド・ディカプリオとの間でゴムまりがはじけるような若さと美貌、そして肉感的な魅力を存分に発揮していたケイト・ウィンスレットが、本作では、離婚に疲れ、13歳の息子ヘンリーと孤独な二人暮らしをしている中年女アデルに扮しているが、その肉感的な魅力はあの時と全く同じ。もっとも、どちらかという細目の方が好きで太目の女は苦手な私は、同じケイトでもケイト・ウィンスレットよりケイト・ブランシェットの方がいいし、また、同じ美人系の顔でいえば、ケイト・ウィンスレットよりニコール・キッドマンの方が好き。しかし、本作での演技はケイト・ウィンスレットは原作者ジョイス・メイナードがイメージしたとおりの女性像、母親像を見事に演じている。

ちなみに、本作では再三ヘンリーの視点からアデルの心理状況がナレーションされるが、パンフレットにはジョイス・メイナードの原作の一文が次のように紹介されている。すなわち、「彼の手が触れた瞬間、母の目にある表情が浮かんだ。長いあいだ砂漠をさまよひ、ようやく水を見つけた人のような表情。——本文より。」なるほど、なるほど。『失楽園』や『愛の流刑地』にみる渡辺淳一の性愛描写もなかなかのものだが、ジョイス・メイナードの心理描写もなかなかのもの!

3人が家の中で過ごした時間は結果的に5日間だけになってしまったが、3人が手と手を触れあいながら心を交わすことになるのは、大量に余ったピーチを活用してのパイ作りのシーンから。なぜフランクがこんなに料理が上手なのかはよくわからないが、こんな共同作業から「家族の絆」的な雰囲気生まれてくる中、さらに一歩進んでフランクとアデルの間の男女の愛は・・・?「家族3人」でこの家を出て行こうとアデルが決心するについて、アデルとフランクの間に男女の性愛が展開されたのかどうかについて本作は明白に

しないが、私の想像ではきっと……。そして、利口な少年ヘンリーもきっとその間、それを見て見ぬふりを……。

■□■5日後の、この結末は仕方なし?■□■

本作には回想シーンの中で、若きフランク（トム・リピンスキー）が恋におち、結婚し、子供が生まれる姿が描かれていくが、そこにみるフランクは実にいい男。したがって今、脱獄犯としてアデルとヘンリーの目の前にいるひげ面の男がそれと同一人物だと言われても、にわかには信じられないくらいだ。ところが、アデルから頼まれたスーパーでの買い物を終えてヘンリーが家に戻ってみると、そこにはきれいにひげを剃ったフランクの姿が。こりゃまるで別人！フランクってこんなにいい男だったの！

そこで、アデルから聞かされたのは、アデルとフランクと一緒にこの家を出ていくという驚くべき話だが、既にこれまでもアデルの心理描写を詳しくかつ適切にやってきたヘンリーは、そんな2人の行動を予想していたらしい。しかし、そこでヘンリーの口から出た質問は、「僕はどうなるの?」というものだったから、アデルはビックリ。アデルとフランクの計画は、ヘンリーを連れてこの家を出て、誰も知らない新たなカナダの地で、「家族3人」でひっそり暮らすというものだったのに、ヘンリーは何を遠慮しているの？

フランクがアデルの家に闖入してきてからは、近所の人がモノを届けてくれたり、隣のイヴリン（ブルック・スミス）が知的障害のある車椅子の息子バリー（マイカ・ファウラー）をしばらく預かってくれと無理を言ってきたり、と何度かフランクの闖入がバレそうになる危機があったから、5日間も隠れて過ごすことができたのは奇跡に近い。しかし、車への荷物の積み込みも完了し、いよいよ明日は「家族3人」でカナダへ出発する日。そんな時、外に出かけたアデルは、トレッドウェル巡査（ジェームズ・ヴァン・ダー・ビーク）から声をかけられ、自宅まで送ってもらうことになったが、さてトレッドウェル巡査は家の異変に気付いたの？私に言わせれば、いくらアデルとヘンリーの協力があつたとはいえ、フランクが5日間もアデルの家に隠れ住めたこと自体が奇跡だから、その後に展開される本作の結末はやむをえない……。

■□■その後の、更なる展開は?■□■

なお、本作後半には新学期でヘンリーの学校に入ってきたおませな女友達エレノア（ブリード・フレミング）が登場し、アメリカン・ニューシネマの名作『俺たちに明日はない』（67年）の主人公ボニーとクライドの話をする。それが、アデルとヘンリーが大量の現金を引き出そうとしていることに不審を抱いた銀行員からの質問に対するヘンリーのとっさの機転として役に立つので、それにも注目したい。

それはともかく、5日間にわたる「とらわれて夏」が本作のような結末になるのはやむをえないが、本作ではその後のヘンリーのナレーションにも注目！そこで語られるような「ハッピーエンド」は実際にはありえないだろうが、映画としてならOKかも……。私はそう判断したが、さてあなたは……？